

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2025 年(令和7年)
11 月 5 日 第 750 号



PDF 版

国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈2025年9月7日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

あけの かえるこ
朱野 帰子 著

『対岸の家事』

まつお まさこ



今回図書室のつどいに参加したきっかけは、ドラマ『対岸の家事』を見て、登場人物の思いに共感したり、一緒に悲しくなったり、時には「どうしてこんな気持ちになるのだろう」と考えたり、感情を大きく揺さぶられながらドラマを見ていたからです。ドラマを見終わった後も、家事や育児、仕事の両立に関するモヤモヤはあり、そんな時に図書室のつどいのチラシを目にし、朱野さんの話を直接聞いてみたいのと、チラシの【共有し合うことで、それぞれの日々が少しでも前向きになれるはず!】というコメントを見てこれだ!と思い申し込みました。

当日は公民館に行くことが初めてだったので、公民館の駐輪場に自転車を止める時から「駐輪場はここでもいいのか?」「入口はここかな?」「会場は地下?」と、初めての場所に少し緊張していました。しかし、会場に入って講演が始まると、その緊張はすぐにやわらぎ、朱野さんの「夏休みが終わって解放された」という言葉に大きくうなずき共感している自分に気がつきました。ドラマだけでは知ることのできなかった、朱野さん

の小説への思いや朱野さんの人柄を知ることができ、とても充実した時間となりました。

作品の中で私が特に好きなのは、主人公の詩穂が「専業主婦であることを自分で選び取っている」とはつきり言える強さを持っている点です。人に押しつけられたのではなく、自分の人生を自分で選んだと胸を張れる姿はとても印象的でした。また、もう一つの好きな点は、地域の人々のさりげない支え合いが描かれているところです。公園や近所の道端で年齢関係なく、さりげなく声を掛け合ってお互いを気遣っているところです。

朱野さんのお話の中でも、「かつては仕事と家事を両立できるのは健康で体力のある一部の人に限られていました。しかし、今の社会では、仕事も家事も育児もすべてこなすことが「当たり前」とされる風潮がある一方で、多くの人が余裕を失い、地域に目を向けられなくなっている」という言葉に不安を抱きました。私自身も地域とのつながりは大切だと感じているながらも、地域で何かしているのかといわれると、何もしておらず、日々の忙しさを言い訳に地域に目を向けていないことにも気がつきました。

質疑応答の中で朱野さんが話されていた「セルフケアの大切さ」という話も心に残っています。もし専業主婦がいなくなったら社会はどうなるのか、という問いに対して、「誰かを頼る前に、自分自身を整えることが重要」と語られていました。自分を守る力を持つことが、結果として誰かを支えることにもつながるのかもしれないと自分なりに解釈しました。この作品に描かれていたように、地域でさりげなく支え合える社会を実現するにはどうすればいいのか、私なりに少しずつ考えていきたいと思っています。

今回参加して、自分なりの生活、やりたい仕事とやらなくてはいけない事、自分なりの育児や家事などを考えるきっかけになりました。朱野さん話を聞き、自分自身のケアを大切に、自分なりの生活を地域で楽しくしたいと改めて感じました。また、私は小説をまだ読んでいないので、小説を読み、ドラマには描かれていない登場人物の背景や思いにも触れて、物語を楽しみたいと思います。

図書室のこころ

『とびこえる教室』

フェミニズムと出会った僕が
子どもたちと考えた「ふつう」



お話 星野 俊樹 (元小学校教員)

日常のあちこちから聞こえてくる「ふつう」という言葉。みなさんにとっての「ふつう」とは、一体何でしょうか？著者の星野さんは、典型的な家父長制の家に育ち、「男らしさ」を求められる違和感や自身のセクシュアリティについて理解者を得られない生きづらさを感じながら生きてきました。そんな星野さんは、大学でフェミニズムと出会うことで生きづらさと向き合い、その後、小学校の教師になります。そして自分のような子どもを少しでも減らしたいと、子どもたちにジェンダー規範やセクシュアリティについての「ふつう」を問いかける「生と性の授業」を試行錯誤しながら実践してきました。

今回は、星野さんの生い立ちから教育実践までのお話を伺い、星野さんがこれまでの経験を通して考えてきたことを共有し、誰もが自分らしく生きていける社会について考える機会にしたいと思います。

〈星野さんの本〉表題作 (時事通信社)

と き 11月29日 (土) 朝10時〜12時

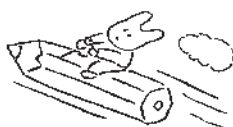
ところ 公民館 地下ホール

定員 70名 (申込先着順)

申込先 11月7日 (金) 朝9時〜

電話または申込フォームより

公民館 ☎0425725141



講座参考図書

ハンセン病問題を知る・考える
〜講演とドキュメンタリー映画上映の連続講座〜

■と き 12月13日 (土)、20日 (土)、1月17日 (土)

講座の詳細は
公民館だよりを
ご覧ください。



- * 13歳から考えるハンセン病問題 差別のない社会をつくる……………江連恭弘監修 (かもがわ出版)
- * 隔離の文学 ハンセン病療養所の自己表現史……………荒井裕樹 (書肆アルス)
- * 菊池事件 ハンセン病差別の壁をこえるために……………徳田靖之 (かもがわ出版)
- * 島を出る ハンセン病回復者・宮良正吉の旅路……………上江洲義正 (水曜社)

公民館 de 防災 防災スタンプラリー

■と き 11月30日 (日) 朝10時〜昼1時

- * 今さら聞けない防災の超基本 地震・津波・台風・猛暑・豪雪etc. から命を守る……………永田宏和監修 (朝日新聞出版)
- * 全災害対応！最新子連れ防災BOOK 被災ママパパ1648人と作りました……………富川万美 (祥伝社)
- * トイレからはじめる防災ハンドブック 自宅でも避難所でも困らないための知識……………加藤篤 (学芸出版社)

〈アンケートのおねがい〉

今年印象に残った
本は何ですか？



図書室月報では、毎年1月号で「今年印象に残った本」の特集をしています。ぜひご協力をおねがいします。しめきりは、12月7日 (日) です。くわしくは、図書カウンターまでどうぞ。



新着図書から

〈総記〉

生成 AI 社会

河島茂生 (ウェッジ)

051

『台湾愛国婦人』という文学場 下岡友加 (三人社)

007

〈哲学 心理学 宗教〉

自己肯定感は高くないとダメなのか

榎本博明 (筑摩書房)

146

なぜ人は自分を責めてしまうのか

信田さよ子 (筑摩書房)

146

〈歴史〉

写真が語るアイヌの近代

大坂拓 (新泉社)

227

ユダヤ人の歴史

鶴見太郎 (中央公論新社)

211

東京大空襲を指揮した男カーティス・ルメイ

上岡伸雄 (早川書房)

289

戦争と音楽

古川隆久 (中央公論新社)

289

〈社会科学〉

西洋近代の罪

大澤真幸 (朝日新聞出版)

304

西洋の敗北

エマニュエル・トッド (文藝春秋)

304

平等とは何か

田中将人 (中央公論新社)

311

女性政治家が増えたら何が変わるのか

秋山訓子 (集英社)

314

知っておきたい！公職選挙法

井戸まさえ (岩波書店)

314

わが家は「ユダヤ人の家」だった

インケ・ブローダーセン (原書房)

316

虚構の日米安保

古関彰一 (筑摩書房)

319

教えて南部先生！18歳から知っておきたい憲法改正

国民投票法 南部義典 (シーアンドオール研究所)

323

裁判官の正体

井上薫 (中央公論新社)

323

韓国人と結婚した日本人女性たちとアイデンティティ

竹村博恵 (大阪大学出版会)

334

多様性を包む共同体は可能か？

(批評社)

361

みんな彼女のモノだった

ステファニー・E. ジョーンズ・ロジャーズ (明石書店)

367

ハタチまでに知っておきたい性のこと

橋本紀子編 (大月書店)

367

老いの思考法

山極寿一 (文藝春秋)

367

沖縄軍事性暴力を生み出すものは何か

高良沙哉 (影書房)

368

3・11子どもだった私たち

金本暁編著 (耕文社)

369

学校とジェンダー

山根真理編著 (学事出版)

370

群れから逸れて生きるための自学自習法

向坂くじら (明石書店)

375

差別の現代民俗学

「差別・排除の民俗学」研究会編著 (明石書店)

380

〈自然科学〉

環境と生態

畑憲治 (学文社)

468

ダウン症で、幸せでした。

姫路まさのり (東京ニュース通信社)

493

〈工業〉

私たちは何を捨てているのか 井出留美 (筑摩書房)

588

モード誌と戦争

和田博文 (平凡社)

589

〈産業〉

酒場とコロナ

大竹聡 (本の雑誌社)

673

〈芸術〉

女性・戦争・植民地 1919—1939

澤田直編 (水声社)

702

たのしい江戸絵画入門

長田結花文・絵 (講談社)

721

戦時下の絵本と教育勅語 山中恒 (子どもの未来社)

726

〈言語〉

僕たちは言葉について何も知らない

小野純一 (ニューズピックス)

801

〈文学〉

シンデレラの末永く幸せな変身

北村紗衣編 (水声社)

909

多和田葉子の地図

野島直子 (彩流社)

910

移動そのもの

井戸川射子 (筑摩書房)

911

熟柿

佐藤正午 (KADOKAWA)

913

へこたれてなんかいられない

ジェーン・スー (中央公論新社)

915

縄文の子

関口みどり (ハレル舎)

916

C線上的アリア

湊かなえ (朝日新聞出版)

917

気の毒ばたらき

宮部みゆき (PHP研究所)

918

猫の刻参り

宮部みゆき (新潮社)

919

世界99上・下

村田沙耶香 (集英社)

920

禁忌の子

山口未桜 (東京創元社)

921

中央図書館、
北市民プラザ図書館
臨時休館のお知らせ
11/10(月)～14(金)中央図書館、北市民プラザ図書館は
蔵書点検のため、臨時休館いたします。●
公民館図書室および
各分室は開室日通りです。

図書室のこころ

『産む気もないのに生理かよ!』
—「子どもを持たない」選択と迷い—

お話 月岡 ツキ (コラムニスト)

母という属性に強いられる役割を考えると、自分が子どもを育てられるとは思えないけれど、「母にはならない」と最終決定するには迷いを感じる……。そんな気持ちに思い当たることはありませんか。

月岡さんは、現時点では「子どもを持たない」生き方を選んでおり、子どもを持たないことで投げかけられる言葉やメディアの情報によって生まれるモヤモヤを言語化し、多数の媒体にて発信をされています。今の選択に至った理由は、昔からずっとあったけれどもなかったことにされてきた女性の苦しみと地続きである、と月岡さんはおっしゃっています。

多世代の女性に寄り添いながら、女性の生きづらさについて考え、互いの選択を尊重できるような学びを得る講座にしたいと思っています。ご参加は、性別や年代を問わず大歓迎です。

〈月岡さんの本〉表題作 (飛鳥新社)

☆

とき 12月7日(日) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 11月11日(火)朝9時〜

電話または申込フォームより

公民館 ☎042(572)5141



〈私の本棚から 第2回〉

宇佐見りん著

『推し、燃ゆ』

川越 彩心 あやみ



「推しが燃えた。ファンを殴ったらしい」

この物語は、そんな一文で始まる。

この物語の主人公は、皆が当たり前にできていることができないことに日々悩んでいる女子高生のあかり。皆と同じスタートラインにすら立てないから、そこに立てるように必死に頑張っている。人よりもきつと、何倍も、何十倍も頑張っている。

けれど結果が出ないから、自分の努力は無かったことにされてしまう。あかりはそんな生活を続け、今にも崩壊寸前の心を推し活によって何とか支えて生きている。そんな時に飛び込んできた、推しが炎上したというニュース。それ一つによって、あかりの人生の歯車が狂い始める……というのがこの物語の粗筋だ。

「推し」とは、あかりにとって「生きる理由」

であり「背骨」である。そんな推しが揺らげば、主人公も揺らぐのは必然。つまり、主人公自身が常にとつともなく不安定なのだ。この物語は、推しの炎上と同時並行であかりの日常も描かれる。だが、日常は常にふわふわとしている。人と話すことが苦手であることや、生きる理由が画面越しにいる赤の他人であること等の特徴が、地の文にもくつきり表れているからだだろう。この文章のいたるところに散りばめられた、一つ一つの主人公

の「他とは違う」行動が、「推しがいなければ生きていけない」という事実を何度も読者に突きつけてくる。

私にはあかりと同じように推しがいる。私が精神的に不安定になっていた時期に偶然出会い、精神状態が改善した今でもずっと推し続けている。その推しは当時の私の生きる理由だったのか。そう聞かれれば私は迷わず「はい」と答えるだろう。私やあかりの推しは手が届かない、遠いところにいる。だからこそ、身近に信じていることができる人が居ない人ほどより深く推しに依存していくのだろう。

この物語はコロナを境に一般化した「推し」という概念について深く考えさせられるものである。「推し」がいる人もいない人も、ぜひ読んでみてほしい作品だ。
(河出書房新社)

くにたちブッククラブ

—自分と「似ているもの」/「似ていないもの」—

小山田浩子『工場』(新潮文庫)

講師 深津謙一郎

(共立女子大学・日本近代文学)

とき 11月13日(木) 夜7時半〜9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館 ☎042(572)5141

またはホームページより申込

* 次回は12月11日(木)

中島京子『夢見る帝国図書館』
(文春文庫) です。

ブッククラブ HP▶

